

これからの社会科学学習で大切にしたいこと

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 小倉 勝登

1 これからの社会科学学習で大切にしたい2つの視点

現在、学習指導要領の改訂に向けて、審議が進んでいる。審議内容としては、例えば、児童生徒の生活実態及び発達段階、小・中・高等学校の学習対象を踏まえて、目標・内容等の体系的な整理などである。その際、社会的諸情勢の変化に伴う新たな課題を踏まえた検討を行うことが求められ、グローバルな協調や競争に関する課題や自然災害、デジタル技術の発展、人口減少社会がもたらす社会構造の変化など複雑化・多様化が進展する社会の状況を踏まえた内容のあり方、社会の分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会の実現を目指す主権者の育成のあり方を示すとともに、グローバル化についての内容の一層の充実、世界の動向とそれらを踏まえた日本のあり方を探究する内容構成の充実、外部専門家との連携等、社会の現状を把握する活動の充実などが考えられる。また、「民主的で持続可能な社会の創り手」の育成に関しては、人口減少社会がもたらす社会構造の変化や災害等への対応を踏まえた、社会の展望と参画についての学習のあり方、創意工夫を促す、地域の特色を踏まえた課題発見・追究・解決の学習過程を含んだ学習活動のあり方と工夫、多様な意見から合意形成を生み出す視点や方法の習得などについて検討することが考えられる。

このように社会的情勢の変化に伴い内容と方法が審議されている中において、学校現場において、これからの社会科の学習で何を大切にしたいのか、考える必要に迫られている。

そこで、様々な情報に惑わされず、よりよい社会の形成に向けて取り組む社会科の学習を確実に行うためには、2つのことを大切にしたいと考えている。それは以下に示す2点である。

- 資質・能力の育成を図る小学校社会科の学習（授業）をぶれずに実践すること
- 次期学習指導要領の改訂に向けた国の動きを捉えて、学習（授業）につなげること

次に、それぞれポイントを説明する。

2 資質・能力の育成を図る小学校社会科の学習（授業）をぶれずに実践すること

資質・能力の育成を図る小学校社会科の学習（授業）をぶれずに行うこと、とは、「**課題を追究したり解決したりする活動**」を通すことである。つまり、小学校社会科学学習においては「**問題解決的な学習**」を通すということである。これは、社会科の特質に応じた学習活動であり、これまでもこれからも重要な学習活動であり、学習過程である。これをぶれずに行うことが今後一層重視される。「**問題解決的な学習**」について、学習指導要領を基に説明する。

小学校社会科の目標の柱書に、小学校社会科がどのような学習を通して、資質・能力を育成するのか、育成する過程が示されている。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

柱書に示されている「社会的な見方・考え方を働かせ」とは、社会科における見方・考え方を示している。ここで言う社会科とは、小学校と中学校を合わせて社会科として表現している。小学校社会科においては、「社会的事象の見方・考え方」ということになる。

次に、柱書に示されている「課題を追究したり解決したりする活動を通して」とは、教科等の特質に応じた学習活動を示している。小学校社会科において考えれば、これは、「**問題解決的な学習**」ということになる。このように読んでいくと、小学校社会科の学習は、目標

(1)(2)(3)で示されている資質・能力を育成するためには、「社会的事象の見方・考え方を働かせ、問題解決的な学習を通す」ことが大前提とすることになる。さらに、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善は、端的に言えば、「問題解決的な学習過程の充実」である。これを実現するには、子供が社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが考えられる。そのためには、教師が社会科の授業を「単元で考える」ことが大切である。

**問題解決的な学習を行うには、
1時間ではなく「単元で考える」こと**

問題解決的な学習とは、
単元などにおける学習問題を設定し、その問題の解決に向けて諸資料や調査活動などで調べ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりして表現し、社会生活について理解したり、社会への関心を高めたりする学習などを指している。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編

3 次期学習指導要領の改訂に向けた国の動きを捉えて、学習（授業）につなげること

次期学習指導要領の改訂に向けた国の動きを捉えて、学習（授業）につなげることは、「R4 学習指導要領実施状況調査改善の方向性を意識する」ことである。つまり、学習指導要領実施状況調査の改善の方向性に示された4つの学習活動を重視した学習を展開することである。

令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査の結果から、明らかになった成果と課題を踏まえて改善の方向性として、3点示している。

○ 指導上の改善点

- ・学習の問題について追究・解決の見通しをもつ活動、複数の情報を関連付けて社会的事象の特色や意味を考え説明する活動、学習で身に付けた知識を使って自分で考えた図や文などでまとめる活動を重視する。
- ・社会に見られる課題を踏まえ学習したことを基に、自分たちにできることなどを考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする活動を重視する。
- ・内容に関しては、例えば、地理的環境の学習において基礎的な知識や技能が定着する指導や、例えば、政治の学習において具体的な事実や意義などを政治の働きと結び付けて考えるようにする指導の充実を図る。

問題解決的な学習活動の充実に関する改善の方向性に示されている学習活動に関して、さらに整理して示すと、次の4つの学習活動が重要であると考えられる。

- ①学習の問題について追究・解決の見通しをもつ活動
- ②複数の情報を関連付けて社会的事象の特色や意味を考え説明する活動
- ③学習で身に付けた知識を使って自分で考えた図や文などでまとめる活動
- ④社会に見られる課題を踏まえ学習したことを基に、自分たちにできることなどを考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする活動を重視する、となる。

(1) 4つの問題解決的な学習活動の重視

① 子供が問題解決の見通しをもつ活動を充実させるポイント

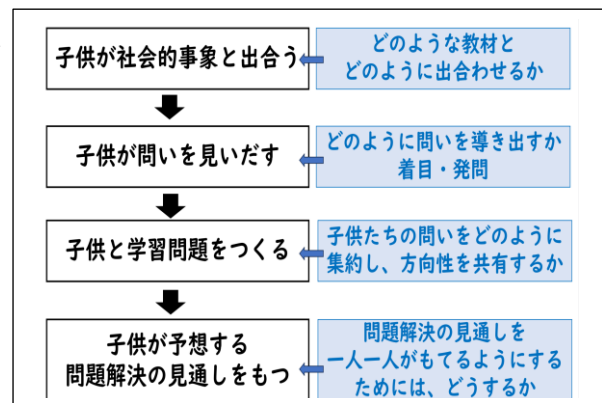
○ 子供が問題解決の見通しをもつプロセスを丁寧に行う子供が問題解決の見通しをもつ活動が重要

子供たちが、問題解決の見通しをもつとは、子供たちが社会的事象と出会い、疑問や予想をもち、学習問題（問い）をつくり、生活経験や既習を基に学習問題の解決に向けて予想し、学習計画を立てる、というプロセスのことである。

問題解決的な学習において、子供たちが学習問題（問い）を立てる前後で「予想する」こと、この活動を大切にしたい。子供たちは、まず、生活経験や既習と結び付けて解決のために予想するからである。子供自らの予想こそ、学習問題（問い）につながり、学習への見通しにつながっていくのである。

そのためには、まず、社会的事象とどのように出合うかが重要である。その出会いが、子供たちの中に驚きや疑問を生み、主体的な問題解決の始まりとなるからである。さらに、子供たちが、「学習問題（問い）」を把握することや解決のために「予想をする」ことを丁寧に扱うことで、子供による問題解決の見通しにつながるのである。つまり、子供が学習問題をつかみ、学習計画を立てるまでを丁寧に行う、ということである。具体的には、右の図の4つのプロセスを丁寧に行うことである。

4つのプロセスを丁寧に行うとは、教師が、次のような工夫を行うことが大切である。



・「どのような社会的事象（教材）とどのように出合わせるか」という、子供と社会的事象との出会いを工夫することである。

・社会的事象と出合ったら、そこから「どのような問いを導き出すのか」という、社会的事象から子供が問いをもつ工夫をすることである。

・子供たちが見いだした問いを基に「子供たちの問いをどのように集約し、学習の方向性を共有するか」という、みんなで追究する単元の学習問題を子供と教師で一緒につくるように学習問題設定の工夫をすることである。

・学習問題に対して、「問題解決の見通しを一人一人がもてるようにするためにはどうするか」という、みんなで学習問題の解決の予想を出し合い、予想を基に追究活動の見通し（学習計画）を立てるように問題解決の見通しをもつ工夫をすることである。

○ 「何を基に予想するのか」を明確にする

子供が問題解決の見通しをもつ活動を丁寧に行う時の難しさや課題は、一体何であろうか。そのヒントは、現場の先生方の実践にある。現場の先生方の多くの実践から、見えてきた課題は、子供が、「何を基に予想をするのか」ということである。子供が学習問題の解決に向けて予想をする時に何を基に予想するか、それを明確にして学習に取り組むことが大切である。では、何を基に予想をすればいいのか、これも実践を基に整理することができる。次に示すA B C Dの4つである。

A 資料を基に予想をたてる

教師は、学習問題を設定した後で、学習問題の解決に向けて予想を立てるための根拠とな

る資料を提示する。もちろん、根拠となるよう十分に吟味した資料を提示することが前提である。子供たちはその資料を基に予想を立てる、ということである。ここで留意したいことは、資料の読み取りではなく、資料を基に学習問題の解決に向けた予想をすることである。そこで例えば「学習問題を解決するために、資料を基に予想を立ててみましょう」などと教師の発問が重要となる。ここでは、資料の吟味（質・量ともに適切か）と教師の発問の吟味（適切か）が大切である。

B 既習（同じ展開）を基に予想を立てる

学習指導要領の内容の中には、1つの記載でいくつかの単元を含んでいるものがある。このような内容は、同じ社会的事象の見方・考え方を働かせて問題解決を図ることになる。つまり、社会的事象の出合いから問題解決の見通しをもつまでのプロセスを同じ展開で行うことができる。つまり、子供たちは、前の単元の学習を基に予想するということになる。これは、社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせる、ということである。

該当する内容を例示すると次のようになる。

- 第3学年(3)「地域の安全を守る働き」・・・警察署と消防署の働き
- 第4学年(5)「県内の特色ある地域の様子」・・・県内の3つの地域
- 第5学年(2)「我が国の農業や水産業における食料生産」・・・稲作、水産物等
- 第6学年(2)「我が国の歴史上の主な事象」・・・(ア)～(サ)

例えば、第3学年(3)「地域の安全を守る働き」では、消防署でも警察署でも、同じ社会的事象の見方・考え方を働かせて問題解決を図ることになる。一般的に学習指導要領の記載事項は一つだが、消防署と警察署の働きを二つの単元として学習することが多い。ここで、子供たちが、社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせて問題解決を図るように意図的に単元デザインをすることが大切である。例えば、二つの単元の学習を通して単元1の学習を単元2で生かすように設定することを意識して単元を構成すると、学習問題の設定や学習計画も、ほぼ同様に展開できる。その結果、子供たちは、追究の見通しや追究の仕方も同じように考えていくことができ、学びをつなぐことができる。

ここでは、教師が社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせることを意識して単元設計することが大切である。

C 既習を基に予想を立てる

既習を基に予想を立てる時に、参考になるのは小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編P.150,151「小・中学校社会科における内容の枠組みと対象」である。ここを見ると類似した内容や内容同士の関係性、内容の系統性などを読み取ることができる。例えば、第3学年「市の様子」と第4学年「県の様子」を見ると、学年は違うが、同じ「地理的環境と人々の生活」に区分され、その中でも「地域」に区分される内容であることがわかる。学年は違っても、同じ枠組みなので、内容が類似し、単元展開が似てくることが考えられる。そこで、第4学年「県の様子」の学習を展開するときに、第3学年「市の様子」の学習を想起するように声かけをすると、子供達は既習を基に予想を立てることにつながると考えられる。これもB既習（同じ展開）を基に予想を立てることと同様に、子供たちが「社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせ、問題解決を図る」ことである。ここでは、教師が学習内容のタテとヨコを意識して単元設計することが大切である。

D 社会的事象との出合いを基に予想を立てる

教師は、子供と社会的事象の出合いを写真資料や映像資料、統計資料などを提示し、様々な工夫する。その出合いの時点で、子供たちが予想を含んだ問いを立てることがある。その予想を含んだ問いは、そのまま学習問題に集約され、学習問題の見通しになることがある。つまり、「子供が社会的事象と出合う→予想を含んだ問いを立てる→学習問題に集約させる→立てた予想を含んだ問いが見通しになる」ということである。このような展開も多く行われている。ここでは、社会的事象とどのように出合わせるか、が鍵となる。

○ 子供が、社会的事象の特色や意味を考え説明する活動を充実させるポイント

問題解決的な学習は、子供が社会的事象から問いをもち、解決の見通しを立て、資料などを活用して調べ、みんなで話し合ったり、考えたりしてまとめる（解決する）学習過程である。その過程においては、社会的事象の特色や意味について考えることが欠かせないが、さらに、考えた特色や意味を説明する活動がとても大切である。

学習指導要領の解説では、次のように示している。小学校社会科で養う「表現力」とは、考えたことや選択・判断したことを説明する力や、考えたことや選択・判断したことを基に議論する力などである。さらに、「説明する力」については、根拠や理由を明確にして、社会的事象について調べて理解したことや、それに対する自分の考えなどを論理的に説明できるように養うことが大切であり、「議論する力」については、他者の主張につなげたり、互いの立場や根拠を明確にして議論したりして、社会的事象についての自分の考えを主張できるように養うことが大切である、示している。つまり、大切にしたいことは、「問題解決のために話し合う」ことである。子供たちは、調べたことや考えたことを交流することで自分の考えを深めることができるからである。考えたことをきちんとアウトプットさせる活動が重要ということである。

つまり、子供が、社会的事象の特色や意味を考えたら、ノート等を書いて終わり、ではなく考えを説明し合ったり議論したりする授業をいかにデザインできるか、ということである。

○ 子供が、自分の言葉（文、図表など）でまとめる活動を充実させるポイント

資料等を用いて作品などにまとめたり図表などに表したり、理解したことを言語によって表現することが大切である。学習して身に付けた知識を基に、自分の言葉や図や表で、まとめる活動を大切にすることがとても大切である。そのためには、学習で身に付けた知識や技能を使って一人一人が図や文などにまとめることができるように丁寧に指導する必要がある。

例えば、白地図や関係図、年表などに整理してまとめる活動の指導を丁寧に行うことが考えられる。さらに、例えば、学んだ重要な用語を基にまとめるように指導したり、授業のまとめを教師が行うのではなく、児童が自分の言葉でまとめることを丁寧に指導したりすることが大切である。

では、具体的に現場の授業実践から取組の様子を紹介する。単元は、第6学年(3) (ア)「我が国とつながりの深い国々の人々の生活」である。

(ア) 子供のまとめ

(子供①)

私は、外国の人々とともに生活していく上で、お互いの国の文化を尊重し合い、自分の生活にも取り入れていくことが大切だと思う。(A)

国によって生活の仕方や食生活、マナーが違うのは国によって文化が違うからだと思う。だから、自分の生活にも取り入れていく理解が出来て、お互いの文化を尊重していくことができるようになると思う。(B)

私は、他国の人々と生活する上で、お互いが相手の国の文化を少しでも理解していることができたなら、文化の違いによって食い違ったとしても、違いを理解し生活していくことができる。(C)

(子供②)

私は、お互いの文化やルールを理解して合わせたり合わせてもらうことが大切だと思います。(A)

理由は、例えば日本のご飯を食べている時にスプーンや箸を落としてしまったら洗いますよね。けれどフランスでは、スプーンやナイフを落としてもう拾わないんです。なので、その違いを合わせてあげたり合わせてもらうことが大切だと思います。(B)

私もこれからは外国の人と交流するときに、相手の国文化を調べて知り、相手にも自分の国の文化などを伝え理解してもらい、合わせたり合わせてもらったりすることを大切にしていきたいです。(C)

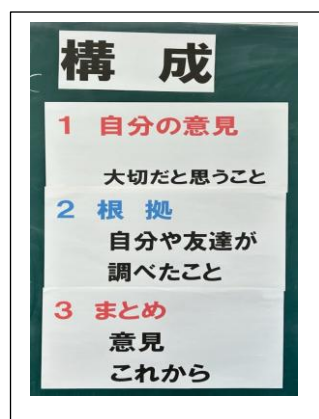
子供たちのまとめを読んでいると、(A)・(B)・(C)の構成になっていることがわかる。(A)は、自分の考えをまず書いている。(B)は、自分の考えの根拠や理由、「なぜなら」を書いている。そして、(C)は、「つまり」という結論を書いている。

では、どうして、このようなまとめ方ができたのだろうか。

(イ) 教師の仕掛け

教師は、まとめる前に、次のような資料を提示している。これは、社会科の学習で活用したものではなく、国語で「構成」について学習をした時に活用したものである。教師は、国語の学習を生かして、子供たちに社会科の学習でまとめ方の指導をしている。その結果、全ての子供が(A)・(B)・(C)の構成でノートにまとめを自分の言葉で書いていた。

教師の仕掛けは、これだけではない。根拠を明確にするために、これまで学習してみんなでまとめた成果物を再掲示して、学習したことを根拠に自分の考えをまとめるように促している。このような教師の丁寧な仕掛け、指導によって、子供たちは、自分の言葉でまとめていくことができるのである。ここが、子供が、自分の言葉(文、図表など)でまとめる活動を充実させるポイントである。



○ 子供が、自分たちにできることなどを考えたり、社会への関わり方を選択・判断した する活動を充実させるポイント

「社会への関わり方を選択・判断する」活動は、学習したことを基に考えることが大前提である。さらに、例えば、学習して習得した知識などの中から、自分たちに協力できることを考え、学級で意見を出し合ったり話し合ったりして、その上で、たくさん出た意見の中から自分たちが本当に出来そうなことを選び出し(選択)、自分の意見や考えとして決める(判断)ことである。

この学習したことを基に社会への関わり方を選択・判断する活動は、全ての内容に規定しているのではない。子供が学習したことを基にして実社会に、あるいは、未来に目を向ける場面を想定しやすい内容を選んで学習活動として示している。ここで大切なことは、学習したことを基に考えること、学習して習得した知識などの中から、自分たちに協力できることを考えること、自分たちが本当に出来そうなことを選び出し(選択)、自分の意見や考えとして決める(判断)ことである。

この学習活動を展開する時に、現場の授業実践から見えてきた課題は、2つである。

① 子供が、課題をきちんと捉えているのか

② 子供は、課題の解決に向けて、学習したことを根拠に社会への関わり方を選択・判断しているのか

この2つの課題を解決しない限り、子供が、自分たちにできることなどを考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする活動を充実させることは難しい。課題解決に向け2点説明する。

① 学習のまとめを行う際に、課題を明確にすること

子供たちは、学習問題を解決するために、調べ、考え、社会的事象の特色や意味を理解していく。そこで、初めて社会がわかるのである。社会がわかったから、その社会的事象の課題が明確になっていく。そう考えると、教師は、教材研究の段階で、この内容は学習を進めていくと、どのような課題が明確になるのか、を理解した上で、単元をデザインしていく必要がある。

② 学習したことを根拠にして、社会への関わり方を選択・判断すること。

課題が明確になれば、それをどのように解決するのか、を一人一人考えていく。その時に、子供たちの考えの根拠が学習したことを基に語られることが大切である。そのためには、単元のこれまでの学習を子供が確認できる掲示やノート、全体での振り返りなどの教師の丁寧な仕掛けが重要になる。

ここで、最後に、子供が、自分たちにできることなどを考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする活動を充実させるポイントを整理すると、以下のようになる。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">○ 社会に見られる課題を把握して、自分たちにできることなどを考えたり選択・判断したりする際には、学習したことを基に表現できるようにする指導が重要である。例えば、単元を通して学習したことを基に課題や新たな問いを見いだすことや社会に見られる課題をしっかりと一人一人の児童が把握できるようにすること、自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりする際には単元で学んだことを基に根拠や理由を明確にして表現できるように指導することが大切である。○ よりよい社会を考えようとする際には、立場を明確にして話し合うなど、多角的に考えるようにする指導が重要である。 |
|--|